

「我が国における保護上重要な植物種および植物群落に関する研究委員会・植物種分科会」(NACS—J、WWFJの共同事業)で一九六一年度から三年をかけて調査をした結果は、本誌八月号に紹介されたとおりで、日本の野生植物の六種に一種は緊急に保護上の対策がとられないと絶滅が危惧されることが明らかになった。

絶滅に追いやられる原因

報告にもあるように、日本の野生種がそのままで危機に追いやられている原因を整理すると、第一に、湿地開発、森林伐採、草地開発などの大規模な環境破壊があげられる。オニバスの生えていた池沼は埋められ、明るい湿地性草原が開発されて、サクランウやフジバカマの生育場所は乏しくなった。森林の伐採によってランや寄生植物、腐生植物の仲間に与えられた打撃は大きかったし、明るい草地の開発によってオキナグサは激減した。ほかに、道路工事の影響を受けたツクシムレスズメ、ダム工事で生育地が水没してしまったオリヅルスミレ、石灰採掘に

た。十余年前にアメリカの研究者が試算をし、熱帯林の破壊などが当時の速度で進めば、今世紀末までに、野生植物の二〇%は絶滅するか、絶滅に瀕する状況に追い込まれるだろうと警告したことがある。今回の調査結果は、具体的な現状調査を通じて、その予測を裏付けたことになり、事態の重大さに改めて驚いている。

よって危険の迫っているチチブイワザクラなど、開発行為によって危くなっている種がある。

一方、園芸を目的とする大量の採取によって、ラン科、ツツジ科、カンアオイ属などは壊滅的な影響を受けたし、わずかな例ではあるが、ウラジロコムラサキやソルワダンのように、導入された動物の食害によるもの、踏みつけによって危機に追いやられるものもある。

そのほか、火山の噴火のような自然現象に伴って絶滅に追いやられたものに、サクラジマハナヤスリ、オオヤグルマシダ、サクラジマイノデなどがある。

種を保全することの意味

なぜ種を保全しなければならないか、という問いが向けられることに疑問をもつが、もし具体的な答を出すとするれば次のようになるのだろうか。

(一) 地球上に現存する生物の種はすべて、四十億年に足らんとする進化の歴史を経てきたものである。ヒトも、同じように進化してきた地球上の同胞である。地球上の生物の一員として、生命を畏敬し、地球上のすべての生物との共存をはかることは、人にとつての倫理の根幹である。

(二) 温暖多雨の気候と複雑な地形の日本列島

は、植物の多様性に恵まれてきた。日本人の生活は古くから自分たちを取り巻く山野草を友とするものだった。記紀万葉の昔から、日本人の心情の糧となってきた植物が消え去ろうとしている。日本人の心情ともいえるべき、古典の美が読み取れない日本人の時代になってしまったのではないだろうか。

(三) 自然界は、その地域の植生を作る多様な植物によって平衡を維持している。野生種が絶滅することは、その自然のバランスを崩すことであり、絶滅する種が出てくることは、自然界



フジバカマ
秋の七草の1つに数えられる植物で、本州・四国・九州に広く分布し、河川敷などの明るい湿った草地に生育する多年草。かつては関東平野・大阪平野などの平野部の河川敷にふつうにみられたが、今日ではごく限られた場所に自生しているにすぎない。全国で27都府県、72の産地のうち、11の産地で絶滅、14の産地において現状不明、3の産地において絶滅が危惧される。(撮影・岩瀬徹氏)

* オニバス フクジュソウ カザグルマ オキナグサ ヒメミヤマ
カラマツ トガクシソウ ムジナモ タコノアシ ヤシャビシヤ
ク オオアカバナ オグラノフサモ イヌセンブリ ガガブタ
アサザ チョウジソウ オオアブノメ ヒシモドキ フサタヌキ
モ イソニガナ (石沢)